

(研究論文)

## 小学校音楽科と国語科の共通点に関する一考察(1) ——「鑑賞」と「読むこと」の指導法に着目して——

西田 治 平瀬 正賢 (長崎大学教育学部)  
山崎 直人 (長崎市教育委員会) 山口 亮介 (盛岡大学文学部)

### 1. はじめに

音楽科における鑑賞の指導と、国語科における文学的な文章を読むことの指導には、曖昧なものをいかに具体的に指導し味わえるようにするかという点で共通点があり、その指導法にも共通点があるのではないか。

この問いのもと、音楽教育を専門とする西田と国語科教育を専門とする平瀬による共同研究をスタートさせ、その後、実際に小学校で両教科の実践経験の豊富な山崎直人氏と山口亮介氏の協力を得て、理論と実践の両面から研究を進めることとなったのが本研究の端緒である。研究をスタートしてみると、二教科の間には予想以上の共通点があったが、今回は音楽科における「鑑賞」と国語科における「読むこと」の指導方法に焦点を絞り、その共通点について考察を深める。なお、本研究の最終的な目的は、共通点を明らかにし現職教員へその知見を還元することで授業力の向上に寄与することにある。

#### (1) 研究のリサーチ・クエスチョンと検証方法

本研究の仮説は、「音楽科と国語科の指導法には多くの共通点があり、その共通点を整理することで、一教科だけを見た場合には見えてこない課題や手立ての発見につながるのではないか」というものである。これについて、文献研究とインタビュー調査により検証を行う。

#### (2) 先行研究

両教科の合科的・横断的な指導については先行研究がいくつかあるものの、両教科の共通点を探るものはごくわずかであり、直接的に本研究と関わるものとしては、白石範孝ら(2018)による著作のみがあげられる。

白石ら(2018)は、「教科で使用する『用語』に類似点の多い国語科と音楽科は、汎用的能力をはぐくむ上で高い関連性を持っているのではないか」という仮説のもとに著作を展開している(p.17)。著作の大部分は、国語科と音楽科に共通する「用語」であるリズムや構成などについて一つずつ取り上げ、具体的な授業場面を設定し解説を行う内容であり、次に共通する手立てなどについて考察が進められている。

本稿では、白石ら（2018）では取り上げられていない学習指導要領の具体的な比較、音楽科における「鑑賞」と国語科における「読むこと」の学習プロセスの比較検討を行う。

## 2. 共通点の整理

### （1）学習指導要領に見出す共通点

音楽科、国語科それぞれの学習指導要領における内容の構成は以下の通りである。

#### 音楽科

「A表現（歌唱、器楽、音楽づくりの三分野から構成）」と「B鑑賞」という2領域と〔共通事項〕により構成

#### 国語科

大きく分けて「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力」等の2点から構成され具体的な項目としては以下のように設定されている。

〔知識及び技能〕

- （1）言葉の特徴や使い方に関する事項
- （2）情報の扱い方に関する事項
- （3）我が国の言語文化に関する事項

〔思考力、判断力、表現力等〕

A話すこと・聞くこと      B書くこと      C読むこと

本稿では、音楽科における「B鑑賞」と国語科における「C読むこと」（文学的な文章）に焦点を絞り、比較を行う。カッコ内のページ数は、それぞれの教科の学習指導要領解説編の該当ページを示している。

音楽科の鑑賞の活動は、曲想と音楽の構造との関わりなどについて理解しながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲を全体にわたって味わって聴くものと示されており、鑑賞領域の内容は次の2点から構成されている（p.24）。

ア 曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴くこと。

（思考力、判断力、表現力等）

イ 曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解すること。

（知識）

アは、曲の特徴を手掛かりとしながら全体がどのようなになっているのかを見通して聴くとともに、児童が思考し判断しながら自分にとっての曲や演奏のよさなどを見いだすことが必要であることを示している。イは、曲想と音楽の構造の二

つを相互に関連させることによって、鑑賞の学習を深めることを意図している (p.23)。

一方、国語科の「C読むこと」の指導事項は、学習過程に沿って4点(構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有)から構成されている (p.36)。4点の内容については、以下のように示されている。

- 構造と内容の把握：叙述を基に、文章の構成や展開を捉えたり、内容を理解したりすること (p.36)。
- 精査・解釈：文章の内容や形式に着目して読み、目的に応じて必要な情報を見付けることや、書かれていること、あるいは書かれていないことについて、具体的に想像することなど (p.37)。
- 考えの形成：文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づいて、自分の既存の知識や様々な体験と結び付けて感想をもったり考えをまとめたりしていくこと (p.37)。
- 共有：文章を読んで形成してきた自分の考えを表現し、互いの考えを認め合ったり、比較して違いに気付いたりすることを通して、自分の考えを広げていくこと (pp.37-38)。

ここから音楽科、国語科のいずれも対象となる作品(音楽作品、文学作品)の構造と内容を理解し、全体を味わうことを意図している点で共通しているということが分かる。

ただし、音楽科では考えを持ったり、共有したりするプロセスが示されておらず、国語科に比べると、どのような学習プロセスを経て、どの程度まで作品を理解させるのかについての具体的な記述が希薄な傾向がある。音楽科においても各自が考えを持つこと、その考えを共有すること、及び作品を理解する学習過程を明示することのいずれも重要である。この点については、国語科を倣って今後改善していく余地があるだろう。

## (2) 学習プロセスに見出す共通点

学習指導要領の比較から音楽科の鑑賞と国語科の文学的な文章を読むことは意図されているものが共通していることが明らかになった。ここでは、具体的な学習プロセスの共通点について考察を進める。

音楽科の鑑賞の指導については、通常3つの学習プロセスが計画されることが多い。例えば、財団法人音楽鑑賞教育振興会鑑賞指導部会編(1985)では、指導計画の基本として、以下の指導プロセスが紹介されている。

### ①第一の段階は感受の過程である

未知の音楽にまず接して印象を直感したり、すでに聴取経験のある音楽に接し

て、過去の印象を思い起こしたりする。いずれにしても、音楽そのものに直面して向かい合う過程である。

②第二の段階は分析の過程である

いちばん最初に聴いた印象を手がかりに、音楽の特徴となる要素を聴き分けたり、ほかの音楽と比べて特徴を発見したりして行く。つまり、自分の印象を聴き返すことによって再確認したり、情動的な感じ方を深めたりする過程である。

③第三の段階は総合の過程である

音楽の全貌がわかり、その細かな特徴も捉えることができると、最初の段階に比べてはるかに音楽が自分に近づき、親しいものになってくる。自分の心の中に想像して聴くことができるようになる。

(pp.16-17 筆者要約)

また、初等科音楽教育研究会編（2011）でも、「鑑賞指導の組み立て方」として以下の記述がみられる<sup>1</sup>。

授業では、次のようなステップを想定して学習活動を組み立てる。

①楽曲に興味をもち、わかりやすい特徴に気付く段階

②楽曲を特徴付けている要素と曲想のかかわりを感じ取り、聴き深める段階

③楽曲の構造を理解し、楽曲全体を味わって聴く段階

(p.95 筆者要約)

一方、国語科においても、音楽科同様に3つの学習プロセスにより計画されることが知られている。解釈学に基づくこの方法は、「通読」「精読」「味読」から構成される三読法と呼ばれ、国語科の学習プロセスとしては古い歴史を持っており、学校現場で広く行われている<sup>2</sup>。

牛山恵（2009）においても、「物語文の一般的な指導過程」として、次のように説明されている。先の「通読」が「(1)通し読み」、「精読」が「(2)確かめ読み」、そして、「味読」が「(3)まとめ読み」と「(4)広げ読み」に対応しているとみることができよう。

(1) 通し読み

通し読みの段階は、作品との出会いによって、素朴な感想や疑問を持つ段階である。

(2) 確かめ読み

<sup>1</sup> 高橋清（1994）p.23 においても同様の学習プロセスが示されている。

<sup>2</sup> 三浦和尚（2006）p.69、石丸憲一（2014）p.19 においても、小・中・高等学校における文学の授業の多くが「三読法」によって構成されているとの記載がある。

感想や疑問から読みの課題を設定し、作品を分析的・実証的に読み深めていく。

### (3) まとめ読み

学習のまとめとして、自分にとってその作品はどのような意味を持つものであったかということをはっきりさせる。

### (4) 広げ読み

作品を朗読したり、感想文を書いたり、関連した他の作品を読んだりして、学習のいっそうの充実を図る。

(p.96 筆者要約)

音楽科、国語科のいずれにおいても、まず全体をとらえ、次に細部を聴き取ったり読み取ったりする過程を経て、再び全体をとらえるという以下の3段階の指導プロセスが主流であることが確認できる<sup>3</sup>。

1. 作品と出会い、全体像をつかむ。
2. 部分ごと・観点ごとに分析的に学習する。
3. 全体を味わい交流する。

また1～3のプロセスは端的に言うと、「全体一部分一全体」という流れを示しており、2をいかに充実させ3につなげるかがひとつのポイントとなる。図表1は、第4学年の教材を例に具体的な比較を行ったものである。

ただし、この指導プロセスについては注意も必要である。一つの手がかりとして学習プロセスの型が示されることは指導の手がかりとしては重要であるが、どの作品においても画一的な指導プロセスをあてはめることになりかねない。石丸(2014)は、三読法について批判的な立場には立たないとしながらも、本来は教材の特性によって読みの方法が多様に示されることが最善であるとし、固定化された指導過程で授業が行われることに対して警鐘を鳴らしている(p.19)。

また、2の分析の段階が詳細になりすぎることにも注意が必要である。この点については、供田武嘉津(1975)が「いたずらに音楽を要素に分析し、それらの要素へのアプローチこそが音楽の“基礎”だとみなすような愚をおかすべきではない。また要素へのアプローとは、とかくドリルの弊害に陥りやすいという点でも警戒を要しよう(p.117)」と述べている。

指導のプロセスはあくまでも一つの型であるという意識と、作品全体と細部をバランスよく扱っていくことが必要である。

---

<sup>3</sup> これら3段階の指導プロセスはあくまで一例であり、他の指導法も存在する。

図表 1：指導プロセスの比較

	国語科 「人物の気持ちの変化を考えて読もう」図書文化社 <sup>4</sup> 教材：ごんぎつね	指導プロセス	音楽科 「曲想を味わってきこう」 国研資料 <sup>5</sup> 教材：ノルウェー舞曲第2番
ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登場人物の思いを、叙述を基に想像して読む。〔解釈〕</li> <li>・自分の考えを発表し合い、感じ方に違いがあることに気づく。〔考えの形成と交流〕</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・曲想を味わう。</li> <li>・楽曲の要素や仕組みを理解する。</li> </ul>
具 体 的 な 活 動 内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全文を読み、初発の感想を持ち、友達と交流する。</li> <li>・全体の構成を理解する。</li> <li>・読解に必要な語句の意味を確認する。</li> </ul>	1. 作品全体と出会い、全体像をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲の構成を捉える。はじめ、なか、おわりの3つの場面に分ける。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登場人物の気持ちについて、場面ごとに叙述を基に想像して読み取る。</li> <li>あるいは、作品全体を適切な読解の観点ごとに読み、登場人物の気持ちを読み取る。</li> </ul>	2. 部分ごと・観点ごとに分析的に学習する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部分ごとに聴取し、音楽を形作っている要素の変化に気づく。旋律、強弱、速さの観点で整理する。この曲では、特徴的なオーボエの音色の理解も含める。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音読発表会や作品紹介のリーフレットづくりを設定して、全体を味わう。</li> <li>・これまでの学習をふまえて、自分の感想や考えを友達と交流する。</li> </ul>	3. 全体を味わい交流する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲全体を聞いて、想像したことや感じ取ったことをお話、イラスト、色分けなどで表現し交流する。</li> <li>・これまでの学習活動を踏まえて、楽曲全体を味わうと同時に、それらの学びを紹介文という形で言語化し交流する。</li> </ul>

<sup>4</sup> 参考『[平成 23 年版] 観点別学習状況の評価規準と判定基準』 pp.136-137 図書文化社

<sup>5</sup> 出典『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校 音楽』 pp.65-70 国立教育政策研究所教育課程研究センター

### (3) 授業づくりのポイントに見出す共通点

両者の指導ポイントの共通点を探るため、音楽科、国語科それぞれの指導のポイントについて西田、平瀬それぞれが書き出し、それをもとに対話を行い、共通点の整理を行った。両教科の指導のポイントは以下の通りである。

#### ○音楽科における鑑賞の活動のポイント

- ・全体の構成（仕組み）を理解させる。
- ・聞く部分を区切り、かつ何を聴くのかを明確にして分析的に聞く。
- ・音楽の仕組みや要素と情景の関連付けを行う。
- ・教師は言語化の手立てをあらかじめ考えておく。身体表現で表した後に言語化するなど。
- ・音楽の仕組みや要素の分析的な聴取だけにならないように、それらを学んだ後に楽曲全体味わう活動を行う。
- ・学習のまとめとして行う言語化は、学んだことを生かした活動であること。

#### ○国語科における文学作品を取り上げる際の授業づくりのポイント

- ・児童の実態と教材の特性をふまえた上で、教材との出会いを「初発の感想」にまとめさせる。
- ・全体の構成を理解させる。
- ・「初発の感想」をふまえて、場面ごと、観点ごとに学習のねらいを焦点化して読み深める。
- ・場面ごとの読み取りの場合、これまでの学習や他の場面とのつながりを持たせるようにする。観点ごとの読み取りの場合、教材文全体の流れをおさえた上で、全体の読み深めにつながる適切な読みの観点や課題の設定を行う。
- ・学習のまとめとして行う感想や考えの交流は、これまでに学んだことをふまえたものとなるようにする。「初発の感想」とは質の異なる交流が期待される。

以上から次の5つの共通点を見出すことができる。

#### ①活動そのものを目的化しないこと

作品を聴くこと・読むことによって何を学ぶのかが重要であり、聴くこと・読むことそのものだけが目的化しないことが重要である。聴くこと・読むことで何を学ばせたいか、理解させたいかこそが授業のねらいとして設定されるべきである。

#### ②ねらいに即して解釈・理解の焦点を設定すること

扱う教材から何を聞き取るか・読み取るかを焦点化することが重要である。音楽作品を聴き深めること、文学作品を読み深めることのいずれも、追求すればきりがないものであるため、ねらいに即してその限度を設定することが重要である。

### ③ねらいを明確にし評価との関連を図ること

その活動で何を身につけさせるのかというねらいを明確化していなければ、観点別評価で見とることができない。その作品を聴くこと・読むことを通して、何を学ばせたいかという「ねらいの明確化」がなければ、ただぼんやりと作品全体と出会うだけで学びとなりにくい。そうすると学習の成就感も生まれない。

### ④子ども一人ひとりが根拠を持って自分なりに語れること

感じ方は自由であるべきであるから、「この作品はこう感じるべき」と押し付けることはしない。かといって、ただ自由に感じることに終始するのではなく、感じたことを自分なりに根拠を持って語れることを重視する。音楽科の場合は、その根拠として音楽の要素や仕組みを活用することが望まれる。国語科は、「ここにこういう描写があるから心情がこうだ」など作品中の表現に根拠を求めていくことが望まれる。

### ⑤言語化のために語彙を増やす指導を行うこと

作品を聴いたり読んだりして、十分に感じ取ってもそれを言語化できなければ友達と交流することができず、学級での集団の学びが成立しない。感じ取ったこと、理解したことを言語化するためには、語彙を増やす指導を行う必要がある。音楽科では、音楽の仕組みや要素と関連付けることが語彙を増やすことにつながる。また、言語化のための身体表現を行うことも有効である。

## (4) その他の共通点——共通の課題

共通の課題としては、以下2点が挙げられる。

### ①その作品から何を学ぶのかが不明確な授業が多い。

これは、全体を味わう活動ばかりで、観点を設けて聞き深めていく、読み深めていく活動の少なさを指摘するものである。教師自身が「この作品でこの観点について学ばせたい」という明確なねらいがなければ、ただぼんやりと作品と触れる機会となってしまう。

### ②学力の見えにくさ

音楽科と国語科は学力の見えにくい教科であると考えられる。算数のようにできた、できないが明確にならない活動が多いためである。もちろん音楽科でも「リコーダーで曲が吹ける」といった明確なものも存在するが、鑑賞における聞き取りや音楽づくりの活動では、身に付いたものが見えにくいという特性がある。だからこそ、教師は見えにくいものをいかに把握するのかの手立てを組む必要がある。



### 3. インタビュー調査

インタビュー調査は、国語科について山崎直人氏<sup>6</sup>（長崎市立大浦小学校校長 教職歴30年 そのうち教育委員会8年、管理職4年、大学院2年間）、音楽科について山口亮介氏<sup>7</sup>（長崎大学教育学部附属小学校教諭 教職歴：21年 そのうち音楽専科経験年数：8年 教職大学院1年）にお願いした。両氏に研究協力を依頼したのは、両氏それぞれが国語科、音楽科の実践経験が豊富であるためである。調査の方法は、両教科の共通性についていかに考えるかについて尋ねる非構造化インタビューの形で実施した。実施日は、2017年5月末日であり、インタビュー時間は1時間である。

話題は多岐に渡ったが、ポイントは以下6点に整理できる。

#### ①国語教育と教科教育を分けて考えることが必要性

山崎：ベースとして国語教育があり、その上にある形で国語科、音楽科などの教科教育があるということを踏まえることが必要。言葉の教育、音楽の教育と安易に並列させずに分けてとらえることが必要（この点については、山口氏も同様の指摘を行っていた）。

#### ②小学校における教科の共通性

山崎：国語科と音楽科は、答えのない曖昧なものを行っているのは共通している。

それと小学校教員は、基本的には全教科を担当しており、教科の指導法には共通性が見える。そのため、まず一つ得意教科を作ることで、他教科の指導力があることが期待できる。

山口：似ていると感じるのは、体育などの技能教科。似ていないと感じるのは算数、理科という印象がある。

①、②から音楽科と国語科を安易に同列に比べることはできないが、両教科の指導法の共通項を探ることは小学校教員の授業力の向上に寄与できるものであることが確認され、本研究の仮説を支持する回答を得ることができた。

#### ③指導のねらいと評価を明確にすることの重要性

山崎：文学作品を指導する際、何を持ってよしとするか、という指導の意図と評価の根拠を明確にすることが重要。その際に単一解の学習なのか、複数解の学習なのかを意識することが有効。（単一解…答えが一つしかない。段落分けや場面がどこで展開しているかなど。複数解…答えが複数ある。この作品をどう感じるかなど。）

---

<sup>6</sup> 所属、教職歴はインタビュー時のものである。

<sup>7</sup> 所属、教職歴はインタビュー時のものである。

本来、複数解であるべき問い（この作品をどう感じるかなど）に対して、教師が単一解を用意して押し付けるようなことはしない。また、単一解の活動があってこそ複数解の活動が生きてくる。単一解の学習を通して、共通して使える学習用語を培うことが基礎となる。例えば、国語科では段落、場面、要約、要点など。

山口：音楽科では要素や仕組みにかかわる言葉を学習して身につけ、共通の用語として活用できるようにするという意味で同じ。

山崎：それを踏まえた上で、根拠として単一解の学習で得た用語を用いながら自分はこう感じると言った複数解の学習があると良い。

#### ④語彙力の重要性

山崎：単一解の活動を通して、学習用語を獲得させていくこと以外に、感じたことをいかに表現するかの指導も必要になる。感想を求める際に「きれい、楽しい」の一言で終わってしまうことが多い。それ以外の言葉で表現してみることを促す。すると他の友達が言った言葉が「まさに自分の言いたかったことだ」など共感が生まれ、子どもたち同士で語彙を深めていける可能性もある。

山口：理論的な言葉と擬音語、擬態語などの曖昧さを表現する言葉の両輪が大切。

③、④については、音楽作品、文学作品という曖昧なものを学習の対象とするからこそ「その教材を通して何を学ばせたいのか」という指導の意図を明確にする必要があることと、感じたことを言葉で表現するための語彙を獲得させることの重要性が確認された。

#### ⑤素材研究・教材研究の重要性

山崎：最近では、すぐに使える指導法ばかりが研究されて、教材研究がおざなりになっているのではないかと。野口芳宏の示す<sup>8</sup>、素材研究、教材研究、指導法研究の3段階が必要であり、その割合は50% 30% 20%が良いとされる（山崎氏は教材研究ではなく、教材化研究が必要であるとしていた。）。素材研究で作品を読み込むことや背景を調べ、教材研究で○学年で教えるならばどこに焦点をあてるべきかと指導内容を精選し、指導法研究でどのような発問を行うかなどの計画を立てる。

#### ⑥教師自身が教科内容の理解を深めるための場としての研修会の意義

山崎：教師が作品をどこまで読み込めるかという素材研究が重要である。その力

---

<sup>8</sup> 野口芳宏（2016）「素材研究・教材研究・指導法研究」『国語教育 2016年5月号』pp.118-119 明治図書

をつけるために研修会に参加することは大きな意義がある。国語科は小学校教員であれば、誰でもが行わなければならないため参加しやすいが、音楽科などの実技系は苦手な教員は参加しづらい雰囲気があるのではないか。

⑤、⑥は、教師自身が教科の内容（音楽そのもの、文学作品そのもの）への理解を深めることの重要性と、それを学べる機会の確保の重要性を指摘するものである。本研究は、鑑賞と文学的な文章の指導法に着目したものであるが、表面的な指導法の共通点のみを追うことは授業力の根幹をなす内容そのものへの理解を浅薄なものへとしてしまうだろう。指導法研究も授業力の向上のためには必要なものであるが、その根幹が内容そのものへの理解の上に成り立つことを合わせて伝えていくことの重要性を確認した話題であった。

以上のインタビュー調査から仮説を支持する内容の回答が得られるとともに、安易な比較にならないこと、曖昧なものを扱うからこそ指導の意図を明確にし、曖昧なものを言葉にして相手に伝えられるよう語彙力を育てていくこと、すぐに役立つ指導法研究のみを追求するのではなく内容そのものへの理解の重要性を伝えていくことの重要性が確認された。

#### 4. 考察

本稿は、「音楽科と国語科の指導法には多くの共通点があり、その共通点を整理することで、一教科だけを見た場合には見えてこない課題や手立ての発見につながるのではないか」という仮説をもとに考察を進めてきた。

鑑賞の活動と文学作品を読むことは、学習指導要領で示されている内容に共通点があり、また指導法も「全体一部分一全体」という3つの学習プロセスを経る共通点があることが明らかになった。また、指導上のポイントにも共通点があることが確認された。

一教科だけを見た場合には見えてこない課題としては、音楽科は国語科を参考として学習プロセスを明記する必要性などが明らかになった。

本稿の考察は、一見すると異なるように見える音楽行為と言語活動の指導にある共通点を明らかにしようとするものである。音を操ることと言語を操ることは実際に似ているという指摘もある。例えば、音楽教育の研究者クリストファー・スモール（2011）は人間の音楽性について次のように述べる。

私にはある確信がある。第一に、音楽の行為に参入することは私たちが人間であることの重要な部分をなすということだ。これは話すこと（スピーチ）に参加できることが人間性の本質に関わるのと同じくらいに重要なことでじっさい両者はかなり似通っている（もちろん、両者に重要な違いがあることも事実だが）。第二に、健全な人間なら誰でも（会話と

同じように) 音楽の才能に恵まれているということだ。もしこの確信が正しいのならば、ほんの一握りの「才能ある」人びとがその他大勢の「無能な」人びとに音楽を聴かせることを可能にしている今日の音楽環境は、それが「クラシック」であれ「ポピュラー」であれ、虚偽に基づいているということになる。これは、私たちが自分たちのために音楽を作る能力が、ハイジャックされているということに他ならない。大多数の人びとは生まれながらの権利である音楽性を奪われていて、その一方で少数のスターたち(そしてかれらを操る人びと)が、私たちが自分たちに欠けていると思いついでいる何物かを売りつけて、金と名誉を手に入れているのだ。(pp.29-30)

スモールの指摘は、音楽を演奏するという行為が一部の専門家のものになっていることに対する警鐘でもある。学校教育を終えても、多くの者は日常的に言語活動を行ってコミュニケーションを楽しむのに対し、音楽については奏でることよりも聴くことに徹するようになる<sup>9</sup>。誰もが言語と同じように音楽を聴いたり演奏したりしながら暮らすことを理想とするなら、音楽科は国語科の指導法から多くのものを学ぶ必要があるだろう。

## 5. まとめと今後の展望

本研究の最終的な目的は、冒頭にも記したように、両教科の共通点を明らかにし現職教員へその知見を還元することで授業力の向上に寄与することにある。平成 28 年度から現在まで、西田・平瀬でペアを組み、教員免許状更新講習にて本研究の成果を内容とした講習会を実施している。講習の内容と受講生である現職小学校教員へのアンケート調査の分析については、稿を改めて報告したい。

また音楽科と国語科の共通点については、鑑賞と文学作品の読むことだけでなく、音楽づくりと作文、我が国や郷土の音楽の指導と伝統的な言語文化の指導など共通点が多いことが予測される。今後も一つずつ丁寧に検証作業を行い、現職教員にその知見を還元していきたい。

### 【引用・参考文献一覧】

石丸憲一(2014)「文学の授業における、いわゆる三読法を見直す：通読段階での読みの指導を中心に」『創価大学教育学論集第 65 号』pp.19-31

<sup>9</sup> これは、総務省統計局による「平成 28 年社会生活基本調査結果」の中の調査項目の一つである「スポーツ 趣味・娯楽をこの 1 年間に何日ぐらいしましたか」という設問に対する答えを見ても明らかである。回答をみると、「CD・スマートフォンなどによる音楽鑑賞」が 49%と大きな割合を占めるのに対し、「楽器の演奏」は 10.9%、「コーラス・声楽」は 2.8%と割合が少ない。また、カラオケが 30.7%と大きな割合を占めているが、「年に 1～4 日」が半数を占めており、日常的に取り入れられているという状況ではない。

- 牛山恵（2009）「(1)物語文」『新たな時代を拓く小学校国語科教育研究』学芸図書株式会社
- クリストファー・スモール『ミュージッキングー音楽は“行為”である』野澤 豊一ら訳 水声社（2011）
- 財団法人音楽鑑賞教育振興会鑑賞指導部会編（1985）『音楽鑑賞の指導と評価 小学校編』財団法人音楽鑑賞教育振興会
- 白石範孝ら（2018）『国語科×音楽科の教科横断授業ー共通「用語」で汎用的能力を育む』学事出版
- 初等科音楽教育研究会 編（2011）『小学校教員養成課程用 最新 初等科音楽教育法 [改訂版]』音楽之友社
- 総務省統計局「平成 28 年社会生活基本調査結果」
- 高橋清（1994）『感性を育てる音楽鑑賞の授業』音楽之友社
- 田中洋一ら（2011）『[平成 23 年版] 観点別学習状況の評価規準と判定基準』図書文化社
- 供田武嘉津（1975）『音楽教育学』音楽之友社
- 野口芳宏（2016）「素材研究・教材研究・指導法研究」『国語教育 2016 年 5 月号』pp.118-119 明治図書
- 三浦和尚（2006）「11 三読法」『国語教室の実践知ー確かな学びを支える 25 のキーワード』三省堂
- 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編』
- 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』
- 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校音楽』国立教育政策研究所教育課程研究センター

